

第38回 福島県建築文化賞 各作品賞 講評

【正賞】

『たまかわ観光交流施設 森の駅 yodge』

首都圏からの観光誘客による交流人口の増加を図る施策として、山間部に立地する廃校となった木造校舎を宿泊施設を核とした観光交流施設に再生したものである。内部は既存の小屋組をいかし、あらわしとすることでダイナミックなボリュームを持つ良質な空間へと変貌を遂げている。また、屋根上テラス、屋根裏ライブラリーなどの様々な工夫を凝らすとともに、キャンパススペースやエントランスの焚き火スペース、サインに至るまで利用者を楽しませる工夫が一つひとつ丁寧に考えられている。新たに設けた東側のアプローチからは旧木造校舎の即物的な印象を与えないが、一方で南側正面には地域住民の記憶に残る校舎の面影を残しており、新しさと懐かしさがバランス良く融合されている。地域住民や卒業生らとの丁寧なワークショップのプロセスがデザインにいかされており、県内外からの観光客に止まらず、地元住民との日常的な交流の場として、より地域に密着した交流施設となる可能性を示した作品である。

【準賞】

『木村眼科クリニック研修センター「兎渡路の家」』

視覚障がい者のための様々な活動を展開してきた眼科医院が、視覚障がい者のケア・サポートのほか市内外から様々な方が集い交流できる場として、東日本大震災の津波で被災した豊間地区に建設した多目的施設である。視覚障がい者への細かな気遣いが、白杖で入口を認識できる床材、濃淡により色分けられた階段、柱の位置を示す垂布、トイレの配置や照明、ダストボックスに至るまで、随所に散りばめられている。また、高い天井の室内空間に配置された家具やアート作品、調度などが非常に魅力的で、建築とのバランスが良く心地良い空間となっている。様々な交流イベントが実現されており、視覚障がい者に限らず一般の方にも開放され、豊かな交流の輪ができる場としての機能に加え、震災メモリアルとしての機能も果たしており、被災地に存在する意義は大きく評価するものである。

【優秀賞】

『すずきレディースクリニック』

前面道路に長く接する敷地形状に沿って建物が配置され、道路に面する外壁のアルミルーバーによるファサードが印象的な建築である。ルーバーにより受診者のプライバシーを確保する一方、ルーバーと建物の間には植栽帯を設け、内部から見ると木々の緑が美しく映え、開放感のある居心地の良い空間となっている。また、各室が中廊下に沿って機能的に配置され、緊急時にもスムーズに移動ができるよう動線が整理されている。建築コストを抑えながら細部までデザインされた、密度の高い建築である。

『ロカド香久山』

季節感豊かな屋敷林を設けた中庭を囲うように住戸を口の字型に配置し、各住戸は中庭からアクセスするよう計画されている。適切な緑化により住民のプライバシーを確保するとともに、住民同士のコミュニティの醸成にも寄与している。また、敷地コーナー部から中庭に続く通路を設けることで、周辺地域との繋がりを生む仕掛けを施している。建設時から近隣住民を巻き込んだイベントを開催するなど、豊かなコミュニティの創造を目指したいというオーナーの思いは、地方都市におけるこれからの賃貸共同住宅の在り方を探る試みとして評価するものである。

『東北電力奥会津水力館みお里 MIORI®』

只見川を望む河岸に立地し、電源開発の歴史や水力発電に関わる資料・絵画等を展示する美術館である。特別豪雪地帯に立地するため、冬期のアプローチ動線や屋根からの落雪を考慮して計画された屋根形状が、周囲の山並みと調和しつつシンボリックな印象を与えている。また、内部は県産木材をふんだんに使用した屋根架構によりダイナミックな空間が構成されている。奥会津の観光振興のみならず災害時には避難所としても活用できる、地域貢献の建築物である。

【特別部門賞】

『アートさをり』

道路に面した外壁には大小様々な窓が配置されており、障がい者によって製作された色とりどりの「さをり織り」を窓際に掛けることによって、外から見るとアート作品のように感じられるディスプレイ・ウィンドウのような仕掛けとなっている。また、布地加工製品のショップとカフェを併設しており一般の方も立ち寄れる地域に開かれた福祉施設である。織物を製作する障がい者のみならず、地域の人達も集う明るい場にしたいという運営者の熱意が伝わる良い作品である。

『くつろぎ納屋 森のキッチン』

かつて農村だった面影を残す閑静な住宅地の一角で、利用されなくなった古い納屋を飲食店に改修し、営業時間外は子ども食堂を運営するなど、地域支援の拠点となることを目指している。元々の軒下部分を客席にした天井の低い落ち着いた空間と部分的に2階床を撤去して梁あらかわしの開放的な吹き抜け空間とが、コントラストの良い空間を形成している。空き家の増加が社会的課題として重要性を増す中で、こうした古い建物を地域支援のために再生する試みは、既存ストック活用のこれからの変容を予感させる好事例である。

『風流のはじめ館』

須賀川市に根付く俳句文化を中心とした多様な伝統文化を体験し、未来に継承するものとして整備した文化交流施設である。白壁の土蔵を全体のデザインコンセプトとし、建物は分棟形式として展示や句会等に利用する静的空間とワークショップ等に利用する動的空間とに明確にゾーニングされ、その中央に配した通り庭が街並みとの連続性を生んでいる。古くからある住宅街の静かな環境の中に立地し、市民の文化交流活動がより深化する可能性が期待できる建築である。

【復興賞】

『福島市写真美術館「花の写真館」』

東日本大震災で被災した大正 11 年建築の石造文化財建造物を修復・耐震補強することで美術館として再生したものである。震災による損傷が大きく一時は解体撤去が決定されたが、建築関係団体や構造専門家をはじめ市民委員会から多くの知見を得ながら、入念な調査、検討を重ね見事に復元している。石造文化財建造物の耐震補強では国内外で数少ない事例と想定されるPC鋼棒を用いたプレストレス工法を採用し、建設当時の面影が損なわれない形で息を吹き返しているのも意義深く、技術的にも学術的にもチャレンジした作品として評価できる。

『大堀相馬焼松永窯』

福島県の代表的な伝統工芸品である大堀相馬焼の窯元が、本拠地であった浪江町から遠く離れた西郷村への移転を決意し再起を図る大きな意味のある建築である。大堀相馬焼の特徴である二重構造に発想を得て建物の断面も二重構造としており、二つの家型の小屋組を用いて店舗と工房をまとめ、それを切妻屋根のシンプルな家型で囲むという独創的なデザインとなっている。店舗にはギャラリーも併設し、伝統工芸品等の文化発信も行っており、大堀相馬焼の復活と今後の新しい展開に期待が高まる建築である。

『小高パイオニアヴィレッジ』

南相馬市小高区を中心部に近い静かな住宅地に立地し、コワーキングスペース、ゲストハウス及びガラス工房からなる複合施設である。行き止まりのない廊下や集会スペースに設けられた大階段など、人々の交流を自然に生み出すユニークな空間構成となっている。また、道路に面したポリカーボネートの外壁がやんわりと内部の気配を外部に伝え、若い世代をひきつける建築となっている。若い世代の雇用機会と人材交流の場をつくり、被災地の復興を創造的に支援する活動拠点を目指したチャレンジングな志は尊い。

(※優秀賞、特別部門賞、復興賞については順不同)